The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	溝口哲学について
Author(s)	里見, 軍之
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 9-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

溝口哲学について

里見軍之

この表題はやや硬過ぎるということは十分承知しておりますが、小生、故溝口教授の業績を良く知るものの一人として、どうしてもお伝えしておく義務があると感じております。というのも、長年同僚として身近に接することができたばかりでなく、僭越ながらたまたま氏の学位申請論文（『超越と解釈―現代解釈学の可能性のために―』）を拝読する機会をえて、ご本人以外ではもっとも精読したのではないかと自負しているからです。以下、その折の報告書の一部の要旨を多少書き直しつつ再録することで責をふさがせていただきたい。

かつては方法論的性格を担うにすぎなかった解釈学が哲学の主題とされるようになり、さらには現代哲学そのものの特徴を表すものとさえみなされるに至ったのだが、この展開は現代哲学の苦境をよく示している。つまり、絶対的な客観的真理とそれを正確に映す主観との二分法に立つ伝統的な立場が揺らぎ、普遍と特殊、全体と部分、理解と解釈、生と学との循環に初めから巻き込まれてしまっている人間存在の有限性、歴史的相対性を出発点とし、その事態を先ず主題化せざるをえない哲学の現況があり、したがって解釈学の資格と権能の問題は現代哲学の内的本質に関わる問題なのである。

本論文は、現代哲学の一つの重要な潮流となっている解釈学的哲学をその根底にまで遡って見直し、そこからあらためて現代解釈学の可能性を捉え直そうと試みた労作である。溝口教授（当時）は現代の解釈学的哲学の展開を、古来よりの文献解釈の技法としての解釈学、ディルタイによる解釈学の哲学化、ハイデガーによる解釈学の存在論化、ガダマーに代表される解釈学の脱哲学化という術語で押さえ、こうした的確な術語化によって解釈学の変貌過程が大いに理解しやすいものになった。

論者はこうした流れを踏まえた上で次の二点で興味深い道を歩もうとした。第一は、解釈学の存在論化によってその後の解釈学の方向を定めたハイデガーも、「存在」問題を専ら思惟の主題とするうちに、学を跳出してしまって秘教的な孤高の道に分け入ったのだが、氏はその存在論化を受け入れつつもあくまで解釈学の立場を徹底していくという際どい道をあえてとろうとしてい

る点である。第二に、ガダマー流の、解釈についての普遍的理論の構築に向かう道が思惟の内実たる「存在」問題をややもすれば等閑に付するのに対し、やはり最後の拠り所として「存在」問題に取り組まなければならないと考え、それに向かう隘路を進もうとしているところである。もちろんこうした両方向は逆向きであるだけに簡単にかみ合わせることができるものではないが、重要な論点であることには違いない。

ところで、論者は「存在」についての思惟の要請とそれへのアクセスとしての「無」というパースペクティヴの必要性を至る所で主張しているが、しかし「存在」は相変わらず謎のままに残されている。解釈の形式論に対して「存在」問題という哲学的内実が確保されるべきことを再三説いているが、ではその内実はいかなるものであろうか。ハイデガー風の詩的で私的な言説しかないのであろうか。ガダマーがその問題にあえて踏み込まなかったのは、彼がそれに気がつかなかったからではなく、むしろこの点にハイデガーの難点を見たからではないであろうか。だが、こうした問いかけに対して性急に答えられるものでないことは論者は十分承知の上で立論しているのであり、難点は現代哲学の、少なくとも解釈学的哲学の手強いハードルと見られるべきものであろう。

本論文は現代の解釈学的哲学の展開を見据え、その問題を鋭く探り当てた渾身の労作である。

溝口論文はハイデガーとは大いに違って、旗幟鮮明にして少しも韜晦するところなく、人柄がよく表れています。他人に対して一方ならぬ配慮は欠かさないものの、少しも怯むことなく、また策は講ずるものの、いたずらにそれを弄することもなく、キッパリと主張を繰り広げられる。逆に当方としてもはっきりものが言いやすいわけで、つき合いやすく、あとくされがない。教養部廃止、大学院重点化、大学の法人化、他大学との合併、定員削減などにまつわり、理念や利害関係がぶつかり合う多事多端な時代でしたが、それだけにますます溝口教授の意見と態度が貴重で重要な意味をもっておりました。面倒な事務処理の必要なことでもきちっと果たされ、まことに信頼のおけるまたとない研究室のパートナーであり、このような同僚に恵まれていたことに今更ながら感謝ひとしおの思いです。今にして思えば、その蔭でさぞご苦労されたものとつくづくと察せられます。

氏にはじめてお目にかかったのは二十数年前、どこかの学会の折懇親会の流れで十数名が合流し一献傾けた時、ノンセクトラジカル的な小生の恩師 T 教授が G 大学 M 教授の口頭発表を酷評されたのに対し、猛然と反論した見知らぬ人がいて、その上 T 教授の教え子 Y 氏とも激しく交戦されたことがありました。T 教授は実は M 教授と大学時代の同級の友人であり、また Y 氏は溝口助教授（当時大阪教育大学）と中学時代の同級生だったという、互いにそれなりに心安い関係であったということは後で知りましたが、その時は度肝を抜かれてしまいました。まだその頃は氏の苗字も頭に入っていませんでしたが、その後同僚となって初めて、ああ、あの時のあの人かということがわかり、よく納得したものでした。

小生の定年半年前（平成 15 年 10 月）、ご一緒にアメリカへ出張したことがありました。カナダ国境に近いニューヨーク州立大学バッファロー校での講演会やマンハッタンのニューヨーク大学（私立）での大学教育についてのヒアリング、ワシントンでのスミソニアン協会での環境問題に関する取り組みのヒアリングなどの活動や、メトロポリタン美術館の見学など、またその前後の煩雑な手続きや各方面への連絡など、そのほとんどを仔細に渉り溝口教授に仕切ってもらい、ずいぶん楽な行程を続けることができました。その間十日余り親しくお話しすることができましたし、頼りになる人だという思いをますます深めた日々でした。帰国後翌年度に入り、さあその時の反省会でも楽しくやらなければと思っていた矢先に、氏の体調思わしくないという話を耳にしたのでしたが、その後結局誠に残念至極の事態に至ってしまいました。

もしご存命なら今の多難な大学でさぞ大きな役割を果たされたいたことだろうと、つくづく残念でなりませんが、でも幸いなことに同教授には手塩にかけた弟子が大勢いらっしゃるので、様々な方面できっと同教授を後継されるものと信じております。

（さとみぐんし　大阪大学・名誉教授）